東国における中世墓地の諸相

―房総の事例を中心に―

笹　生　　衛

目　　次

1．はじめに ……435

2．事例分析 ……435

3．墓域の類型化と性格推定 ……449

4．中世墓域変遷の画期と史的背景 ……453

5．まとめ ……457

1．はじめに

現在、日本各地では公園墓地の普及などに伴い、従来の墓地景観は大きく変貌しつつある。本来、墓地は、祖先と現在の我々家族を結ぶ祖先祭祀の中で重要な機能をはたしてきており、その墓地景観の変化は、そのまま我々の祖先観・家族観の変化を反映していると言っても過言ではないだろう。このように、従来の墓地景観、さらにはそれを支えてきた祖先観・家族観が大きく変化しようとしている現在、今までの墓地景観の起源とその性格について分析し、何がどのように変化しようとしているか見直すことも必要であろう。

現在の墓地景観の直接の淵源は、中世墓に求めることができるであろうが、その研究については現在までに多くの成果が発表されている。特に西日本では近畿地方を中心に、木津惣墓の研究をはじめとして、墓地全体を視野に入れた形での研究がはやくから行われており、最近では奈良県内の事例を中心に墓地景観の変遷や現在の墓地との関連性などを追求する興味深い研究が展開されている(1)。これに対し、東国、特に関東では石塔や板碑といった墓地の石造物に研究の焦点が当てられている傾向があり(2)、西日本ほどの活況は呈していないのが実状である。

近年、静岡県一ノ谷中世墳墓群に代表される中世墓地景観を復元できる考古資料が急増しており(3)、千葉県内もその例外ではなく、年代的にも性格的にもバラエティーに富む中世墓地資料が蓄積されつつある。また、房総は中世都市・鎌倉の外縁地域に当たるという地理的な位置関係から、鎌倉の都市的な墓制と在地墓制との相互の影響関係も予想され、中世東国の墓制を考える上でも重要なフィールドの一つであると言えよう。

そこで、ここでは千葉県内の中世墓地を中心に、墓地景観の具体的な変遷状況が復元できる例を取り上げ、房総における中世墓地の類型化を行うと同時に、その変遷過程や性格の解明も試みたい。

2．事例分析

まず、房総で発掘された中世墓地の中で墓地の変遷が推定でき、それぞれタイプの異なる例について概観してみよう。取り上げる遺跡は、木更津市天神前遺跡、鎌ヶ谷市万福寺裏遺跡及び根郷貝塚、袖ヶ浦市神田遺跡、佐原市吉原三王遺跡、千葉市西屋敷遺跡、東金市久我台遺跡の合計７遺跡である。

＜天神前遺跡(4)＞

木更津市矢那字天神前に所在する。上総丘陵中を西流し東京湾に流れ込む矢那川の上流左岸、標高48m前後の台地上に立地する。中世においては、近衛家領および鎌倉・長勝寿院領であっ

た菅生庄に含まれると考えられ[5]、15世紀代には、上総鋳物師の統括者であり鎌倉府との関連も確認できる大野家の本拠地、菅生庄梁郷内に当たると推定できる[6]。

発掘調査は、平成2年に（財）君津郡市文化財センターにより実施され、古墳時代前期から中期にかけての集落、奈良・平安時代の墓、中世の墓域が検出されている。

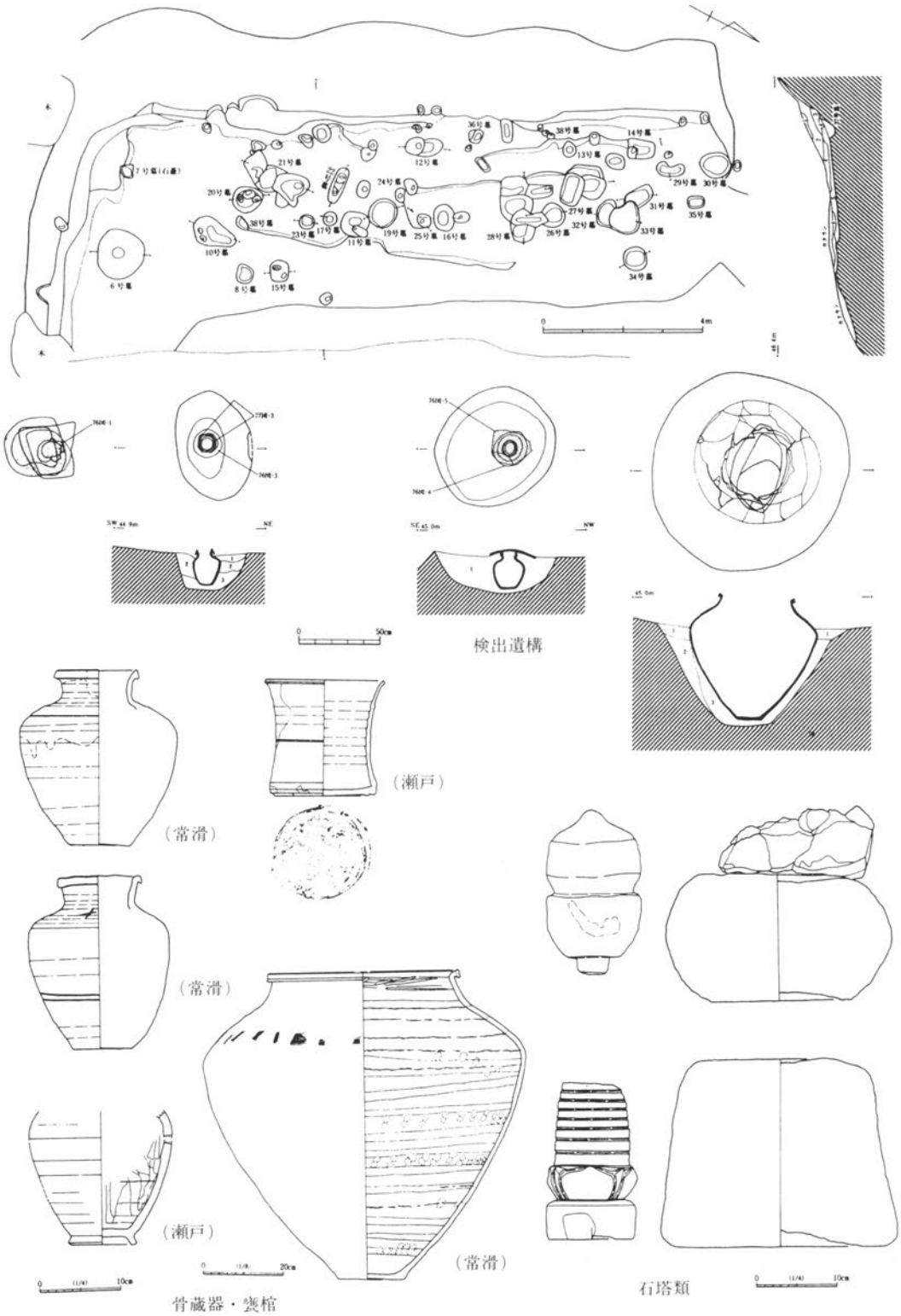
中世の墓域は、台地斜面を削りだしたテラス部分に作られた墓群とその下段の平坦面に広がる土坑群から構成される。テラス部分では40基の墓が確認されており、この中で火葬墓は11基、全体の28％を占めており、その構成比率は比較的高い。埋葬形態では、火葬骨を骨蔵器に納めるもの3基、火葬骨を木製もしくは袋状の容器に入れたと思われるもの8基、常滑窯の大甕を甕棺として遺体を納め土葬したもの1基となり、その他は土坑墓となる。中でも、古瀬戸の筒形容器を骨蔵器に使用した7号墓は、骨蔵器を軟質砂岩の石櫃に納めた極めて丁寧な埋葬形態をとっており特筆される。

墓の上部構造では方形の集石を伴うものが火葬墓、甕棺墓を中心に11基前後あり、さらにテラス部分や下段の平坦面からは五輪塔の空風輪・火輪・水輪各2点、地輪1点、板碑片1点、宝篋印塔の相輪部1点が出土しており、集石墓を中心としてこれらの石塔類が建てられていたと推定できる。

出土遺物には、骨蔵器として使用された常滑窯第6型式[7]の壷2点、古瀬戸後期様式Ⅰ期[8]の筒形容器1点、甕棺に使用された常滑窯第6型式の大甕1点があり、また遺構外の出土であるが、古瀬戸前期様式に含まれると思われる四耳壺1点も存在する。これも骨蔵器として使用された可能性が考えられる。この他には、灯明皿に使用されたものを含む土師質土器小皿8点、北宋銭3枚がある。

出土遺物、特に骨蔵器と甕棺に使用された陶器の年代から墓域の変遷について概観してみると、まず、13世紀後半代にテラス中央部に常滑窯壺を骨蔵器に使用する火葬墓16・19号墓が作られ、これにあい前後してテラス南端の壁際部分に甕棺を使う土葬墓・6号墓が形成される。また、14世紀後半にはテラスの南西コーナー部分に古瀬戸後期様式Ⅰ期の筒形容器を骨蔵器に使用した火葬墓・7号墓も営まれる。この中で、火葬墓16・19号墓は、テラスの中央部に作られ、年代的にも遺跡中最古の段階に属し、方形の集石遺構と石塔を伴っていた可能性が高く、この墓域のシンボル的存在であったと考えらる。そして、これを取り囲むように小規模な火葬墓と土坑墓が営まれており、これらの火葬墓と土坑墓は中央の火葬墓よりは後出のものと考えてよいであろう。また、中央の墓群から離れて作られた6・7号墓についても丁寧な埋葬形態から考えて、その被葬者は、中央の火葬墓と同様、特別視される存在であったとも考えられる。

一方、下段の平坦面では100基を越える土坑と多数のピット群が確認されている。土坑の中で人骨の出土した例はないが、テラス部分の土坑墓と比較して形態・規模ともに類似したものに



第1図　天神前遺跡、検出遺構・出土遺物

ついては土坑墓として考えることができ、この平坦部の遺構群は土坑墓群とそれに伴うピットという性格付けが可能であろう。なお、以下、事例分析では墓と思われるが、人骨が出土していないため墓坑と断定しきれない土坑が含まれる場合、土坑（墓）と表現する。

出土遺物には、古瀬戸後期様式の縁折三足盤1点、常滑窯第7～8型式前後と思われる捏鉢1点、東海系の鍔釜1点、瓦質火鉢1点、土師質土器2点がある。また、宝篋印塔相輪と五輪塔空風輪も、前述したように出土しているが、これはテラス部分からの混入の可能性が高い。出土遺物の年代は、常滑窯の捏鉢が14世紀前半代で最も古いが、その他の遺物については14世紀末期から15世紀前半までの年代が推定でき[9]、平坦面の土坑（墓）群の使用年代については15世紀代を中心とする年代を考えることができよう。また、それに伴うピット群については建物の存在を予想させるものであり、小規模な仏堂（供養堂）が存在した可能性も考えられる。なお、平坦面の土坑（墓）中からは、古寛永に属する寛永通寶2枚が出土しており、17世紀以降までここが墓域として機能したと考えられる。

以上の状況から墓域の変遷をまとめると、テラス部分の墓域は13世紀後半に成立し、中央に作られた火葬墓を中心に14世紀後半前後までの使用が確認できる。そして、14世紀代から15世紀前半にかけて下段の平坦面に土坑墓を中心として墓域の拡大が行われ、この土坑墓群は17世紀以降においても使用されたようである。

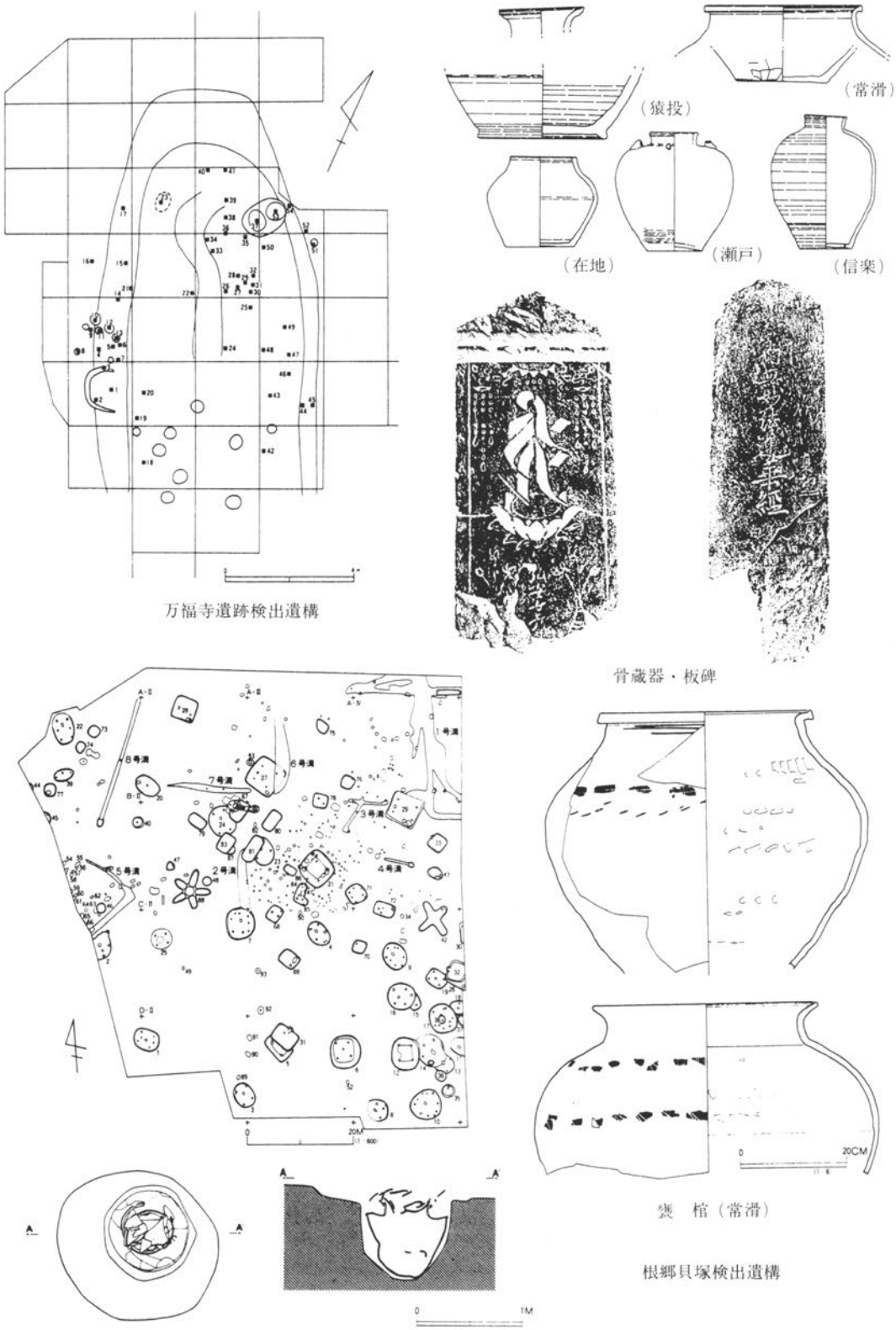
＜万福寺境内遺跡[10]・根郷貝塚[11]＞

万福寺境内遺跡は、鎌ヶ谷市中沢根郷に所在する。東京湾に注ぐ谷地川により形成された支谷に面し、標高25m前後の台地上に立地する。遺跡は、日蓮宗の拠点・中山法華経寺の北東5kmほどの位置に当たり、遺跡周辺は中世では下総国八幡荘内に含まれていたと考えられる。そして、元応元年（1319）に千葉胤貞により八幡荘内の所領が法華経寺に寄進されるに及び、遺跡周辺は同寺の強い影響下に置かれたと考えられる[12]。

発掘調査は昭和52年に鎌ヶ谷市史編纂事業の一環として実施され、150基以上の板碑と多数の中近世墓を検出した。

墓域は、南側の谷部分に面しており、墓は南側に開口するU字形を呈して配置されている。墓は殆どが火葬墓で、明確な例は11基が認められる。このうち7基は骨蔵器を伴い、その他は木製などの容器に入れて埋葬されたと考えられている。また、火葬骨のブロックが54ケ所で確認され、この中には分骨の埋葬と考えられるものも含まれる。

出土遺物の主体は200片を越す板碑片で、原位置は保っていないが確認できる基数は152基に及ぶ。年代の判明するものは39基あり、弘安7年（1284）を最古に、天文23年（1554）を最終としている。年代毎の量的な傾向は14世紀第3四半期の14基を最高に、14世紀第4四半期の6基、15世紀第3四半期の5基、14世紀第2四半期と15世紀第4四半期の各2基の順となってお



万福寺遺跡検出遺構

甕　棺（常滑）

根郷貝塚検出遺構

第２図　万福寺遺跡・根郷貝塚、検出遺構・出土遺物

り、この遺跡における板碑の造立時期は14世紀半ばから後半にかけて最大のピークを迎え、ついで15世紀後半に再び小規模なピークを迎えたことが判明する。

板碑の種子や内容は、阿弥陀如来及び同3尊の種子を記すものが、最古例の弘安7年銘の板碑を含め7例に過ぎず、その他は全てが「南無妙法蓮華経」を記した題目板碑である。なお、題目板碑の最古例は文保3年（1319）銘のものであり、報文でも指摘されているように、この年は千葉胤貞により周辺地域が法華経寺に寄進された年に符合しており、この段階を境に信仰面で法華経寺の強い影響を受けるようになったと考えられよう。

板碑以外では、骨蔵器に使用された陶器、及びその可能性のある陶器片が多数出土している。原位置を保ち骨蔵器に使用されている7例は、常滑窯の小型壷を模倣した在地系の小壷（14世紀代？）、信楽壷（15世紀代）、瀬戸・美濃窯大窯期の灰釉四耳壷（16世紀代）、備前窯蕪徳利（16世紀代）、瀬戸・美濃窯大窯期鉄釉瓶（16～17世紀）、瀬戸・美濃窯鉄釉水注（17世紀代）、瀬戸・美濃窯鉄釉双耳壷（17～18世紀）の7点である。また、原位置を保たず破砕された状態であるが骨蔵器として使われた可能性のあるものに、猿投窯広口瓶（12世紀後半）2点、常滑窯第2型式三筋壷（12世紀後半）1点、古瀬戸中期様式の瓶子（13世紀後半）1点、渥美窯壷1点（13世紀代？）などがある。さらに、常滑窯第5型式前後（13世紀前半）の大甕2点も存在する。これも骨蔵器として扱われているが、その大きさから考えて後述する根郷貝塚で出土している甕棺同様、甕棺として使用されていた可能性を考えることができよう。

以上の骨蔵器の年代から、この遺跡においては12世紀後半代に火葬墓が作られ、墓域が成立したと考えることができる。そして、13世紀後半に大型の板碑を含む阿弥陀如来種子の板碑群が造立されると、これを核として14世紀初頭から16世紀まで次々と題目板碑の造立と火葬骨の埋葬が行われたと考えられ、火葬骨の埋葬は近世にまで及び、近世墓に命脈をつなぐ。

根郷貝塚は万福寺境内遺跡の北側約100mの地点に位置し、万福寺境内遺跡からつながる台地上に立地する。発掘調査は、昭和61年に農地改良工事に先立つ事前調査として鎌ヶ谷市教育委員会によって実施され、縄文時代中期と平安時代前期の集落とともに、万福寺境内の中近世墓域の外縁に当たる中世墓域が発見された。

検出された中世遺構は、甕棺墓1基、地下式土坑1基、土坑墓13基である。調査区のほぼ中央やや北よりの部分に甕棺墓1基と馬を埋葬した地下式土坑が存在し、調査区の西端、台地西側斜面に近い部分に溝で区画された土坑墓群が営まれる。

年代的に最も古いと思われる墓は甕棺墓の53号址で、常滑窯の大甕を棺として使用する。内部には土葬人骨が納められ地上には板碑の断片が残されていたことから、板碑が立てられていたと推定できる。棺に使用された大甕は常滑窯第6型式前後と考えられ、13世紀後半ころの年代を推定することができる。近接して検出された地下式土坑は、平面形態が「T」字形を呈す

る特殊なもので、最奥部に馬1頭の埋葬が確認できるが、伴出遺物が存在しないため年代は不明である。西側斜面に近い土坑墓群では、人骨とともに銭貨13枚が出土している。種類は11枚までが北宋銭で占められ、永楽銭2枚が含まれることから、この土坑墓群は15世紀代以降に成立した可能性が高く、寛永銭が全く含まれないことから17世紀までには墓域としての機能を喪失したと推定できる。

根郷貝塚の中世墓域中最も古い53号址は、板碑を立て甕棺を使用するなど、比較的丁寧な葬法で埋葬されており、この墓は万福寺境内墓地との強い関連のもとに成立したと考えられる。そして、15世紀代には、この墓を核として万福寺境内墓地には見られない土坑墓群が成立したが、近世墓へは存続しなかったようである。

＜神田遺跡[13]＞

袖ヶ浦市蔵波字神田に所在する。東京湾に注ぐ蔵波川中流に面する標高40m前後の台地縁辺部に立地する。遺跡周辺は、養老川流域と小櫃川流域のほぼ中間地点に当たり、中世の所領関係については不明な点が多く残されている。しかし、北側の養老川河口部分と南側の小櫃川河口部分には、馬野郷と金田保といった広大な上総国衙領が広がっており、両地域に挟まれた遺跡周辺も上総国衙もしくは守護所の影響下にあった可能性が考えられる[14]。

当遺跡の発掘調査は、平成5年に（財）君津郡市文化財センターが実施し、古墳時代前期の古墳、奈良・平安時代の集落、そして中世の墓域が確認されている。

中世の墓域は、古墳時代前期の前方後方墳を取り巻いた形で3ブロックが構成されている。第1ブロックは、古墳墳丘の南西側を削って作った二段のテラスに位置し、土坑墓27基、火葬土坑1基で構成される。石塔・板碑はこのグループに限って使用されており、五輪塔36基以上、板碑8枚が出土している。板碑の一枚には延文元年（1356）十月日の紀年銘があり、五輪塔は火輪の状態から15世紀代を中心とする年代を推定できる[15]。また、このブロック南端の土坑墓2基のうち1基からは瀬戸・美濃大窯2期の灰釉端反皿、もう1基からは古寛永に属する寛永通寶が6枚出土している。

第2ブロックは、第1ブロックの北西5mほどの場所に作られる。土坑墓17基で構成され、石塔・板碑の使用は確認できない。土坑墓からの出土遺物には古瀬戸後期様式Ⅳ期の縁釉皿と指し銭状態の銭貨（北宋・明）約40枚がある。

第3ブロックは古墳の北側裾部分に作られ、土坑墓18基、火葬土坑2基、地下式土坑4基で構成され、ここでも石塔・板碑の使用は確認できない。出土遺物は、火葬土坑中から北宋銭が出土したにすぎない。

出土遺物は全体に少なく墓域の詳細な変遷状況は不明な点が多いが、3ブロックの中でも第1ブロックは、延文元年（1356）の紀年銘板碑と石塔類、さらに土坑墓に副葬された瀬戸・美

濃窯大窯２期の端反皿、古寛永から考えて14世紀半ばから17世紀代まで継続して墓域として使用されたと推定でき、石塔・板碑が集中して立てられていることを考え合わせると墓域の中でも中核的な性格を帯びていたと判断してよいであろう。第２ブロックについては土坑墓に副葬された古瀬戸後期様式Ⅳ期の縁釉皿と明銭（永楽通寶・宣徳通寶）から15世紀後半から16世紀代までの使用が確認できる。第３ブロックでは出土遺物が北宋銭に限られ、遺物から年代を限定することは困難であるが、土坑墓、地下式土坑からなる墓域構成は、後述する吉原三王遺跡や西屋敷遺跡の墓域構成と共通し、15～16世紀代を中心とした年代が推定できよう。

以上をまとめると、14世紀半ばに第１ブロックの墓域は成立したと考えられ、板碑の造立は開始されており、続く15世紀代には五輪塔が多数立てられることになる。また、15世紀代には墓域の拡大が行われ、第２・第３の墓域ブロックも成立したと考えられる。そして、第１ブロックを中心として17世紀まで墓域として存続したと推定できる。

＜吉原三王遺跡[16]＞

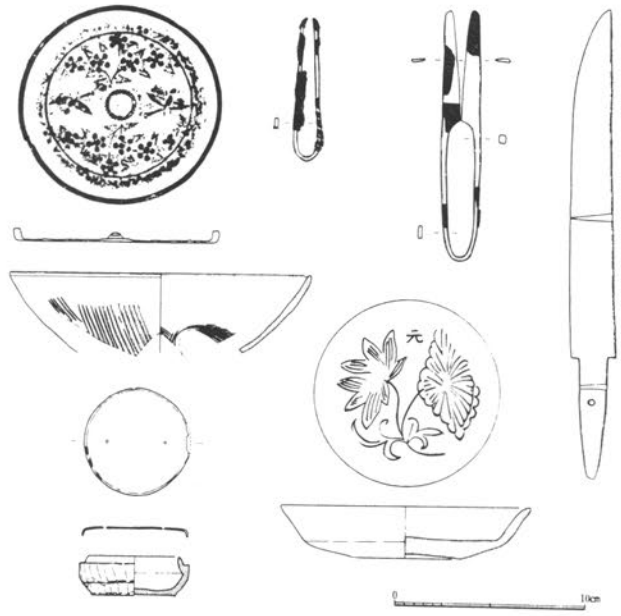
佐原市丁子字天ノ宮に所在する。香取神宮の南東1.3kmほどの地点に当たり、香取神宮の北側から入り込む支谷の最奥部を望む標高40m前後の台地上に立地する。この地域は古代以来、香取神宮の強い影響下にあり、中世においては香取社領34ケ里のうちの三条一里「吉原里」に相当する[17]。

当遺跡の発掘調査は、昭和58･59年の２ケ年にわたり（財）千葉県文化財センターが実施し、香取神宮の神戸集落と思われる古墳時代後期から平安時代後期までの集落と中世墓地とが確認されている。

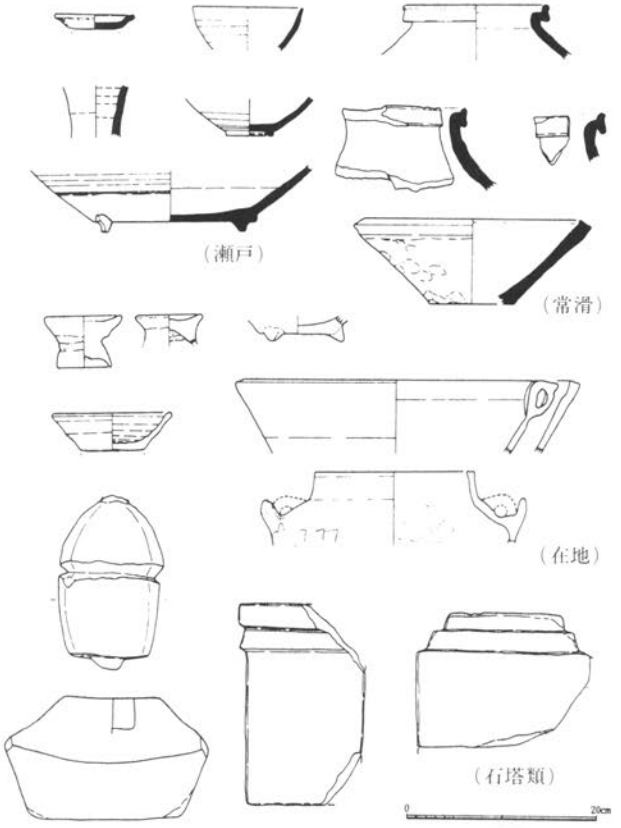
中世墓地は、路線部分の発掘調査のため全容は把握できないが、古代以来の溝（中世には道路として使用）で区画されたＡ～Ｃ区までの３ブロックが確認できる。

Ａ区は、調査区の北側、支谷に面する部分に位置し、土坑（墓）20基以上、地下式土坑１基で構成されており、Ａ区のほぼ中央に位置する594号土坑では人骨が、南端部分の507号土坑では馬骨が出土しており、土坑墓としての使用が確認できる。Ａ区の土坑墓中、副葬品から年代の判明する例に501号土坑墓と508号土坑墓がある。501号土坑墓では和鏡「山吹双鳥鏡」、同安窯Ⅰ類青磁碗[18]、青白磁合子、毛抜き、短刀が、508号土坑墓からは白磁Ⅰ類皿が出土しており、ともに12世紀後半代の年代が推定でき、当遺跡の中世墓の中では最も古い土坑墓と考えられる。また、この両土坑墓周辺には、512号・516号・565号土坑など11世紀代の土器群を伴う土坑が存在するが、これらの土坑についても人骨が出土した佐倉市高岡遺跡の11世紀代の土坑墓と形態的に類似しており[19]、土坑墓の可能性も考えられ、501・508号土坑墓に先行する土坑墓群の存在も推定できる。一方、Ａ区のほぼ中央には地下式土坑１基、土坑（墓）13基以上で構成される墓域が形成され、中心の土坑（墓）群（ＰＳ３）からは槍の穂先などの鉄製品とともに古瀬

遺構全体図(S＝1/1,200)



501・508号土壙墓出土遺物



土壙・溝出土遺物

第3図　吉原三王遺跡、検出遺構・出土遺物

戸後期様式II期の縁折小皿1点、同じく後期様式III期前後と思われる平碗と盤が出土しており、この土坑（墓）群は14世紀末期から15世紀前半にかけて使用されていたと考えられる。

B区は、A区の南側、古代以来の溝1を隔てて位置する墓域で、西側は溝9により東側は溝3により区画される。地下式土坑3基、擂鉢状の大型土坑1基、土坑（墓）16基以上により構成される。遺構の配置は、溝1にそって3基の地下式土坑が並び、その南側、溝3までの部分を中心に多数の土坑（墓）が営まれる。中でも、溝1と溝9の合流部分に作られた623号土坑では人骨が出土しており、墓坑としての使用が確認できる。遺構に伴う出土遺物では、龍泉窯系青磁碗I－5b類1点、常滑窯第5型式の甕1点、古瀬戸後期様式III期の縁折三足盤1点、在地産内耳鍋1点、土師質土器小皿5点があり、年代的には13世紀中ごろから15世紀代までの幅があるが、古瀬戸及び在地系製品の年代から14世紀末期から15世紀代が主体となると推定できる。また、溝3・9、それに周辺グリッドから宝篋印塔の基礎1点、五輪塔の空風輪2点、火輪2点が出土している。いずれも、15世紀代の特徴を示し[20]陶磁器の年代的な傾向とも一致することから15世紀代には少なくとも宝篋印塔1基、五輪塔2基が建てられていたと推定できる。

C区は、溝9をへだててB区の南西に当たる部分に位置し、東側は溝9により、北・南は溝28・11により区画される。地下式土坑1基、擂鉢状の大型土坑2基、土坑（墓）5基以上で構成され、中央部に土坑（墓）群があり周囲を擂鉢状の大型土坑と地下式土坑が取り囲む。遺構に伴い年代の推定できる遺物には古瀬戸中期様式の瓶子1点、後期様式I期の平碗1点、III期からIV期に属すると思われる縁釉小皿2点、天目茶碗1点、盤1点、大窯期にかけての製品と思われる天目茶碗1点、鉄釉仏華瓶1点、常滑窯第6型式の甕2点、第8型式の捏鉢2点がある。さらに、五輪塔の空風輪部1点と下総型宝篋印塔の篋部1点が、土坑内から出土している。出土遺物の年代的な傾向は、15世紀代のものが多く、15世紀後半から16世紀代の遺物も存在し、16世紀代の年代が推定される下総型宝篋印塔の存在とも矛盾しない[21]。

以上の状況を整理すると、まず、12世紀後半代にA区の墓域が成立する。ここは11世紀代の墓域であった可能性も考えられ、古代末期以来の系譜を引く墓域としての性格づけも可能である。A区に次いで、14世紀後半までにはB・C区の墓域も成立しているようである。そして、14世紀後半から15世紀前半にかけて各墓域には地下式土坑が作られたと考えられ、出土遺物も増加し墓域の拡大・整備が進められる。砂岩製の宝篋印塔・五輪塔も15世紀代には建てられることになる。続く16世紀代では、A・B両区画では遺物が確認できないが、C区では瀬戸大窯期に属する可能性のある陶器や下総型宝篋印塔が存在し、16世紀代も墓域として存続したと考えられる。

＜西屋敷遺跡[22]＞

千葉市大宮町に所在し、都川とその支流に挟まれた標高20m前後の台地上に立地する。中世

においては、下総守護・千葉氏の本貫地、八条院領千葉荘内に属する[23]。千葉氏の居城亥鼻の千葉城も近くに位置し、中世下総の政治的な中心地に隣接する地域である。

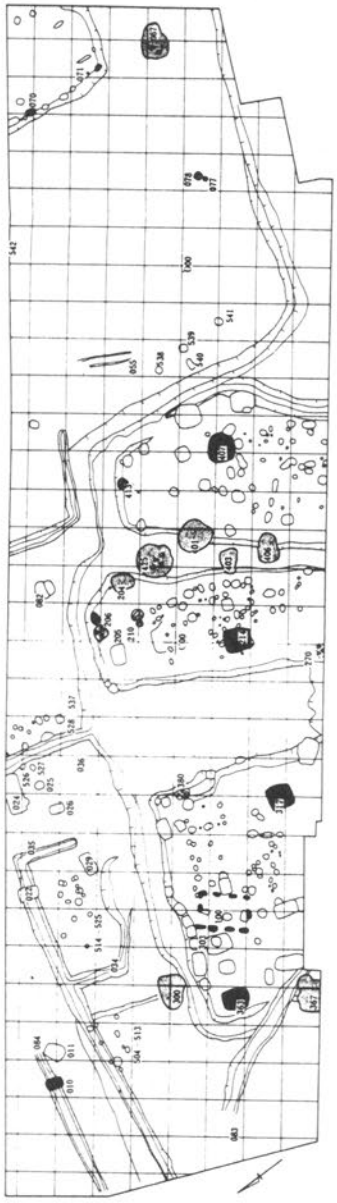
発掘調査は、昭和51年から52年にかけて（財）千葉県文化財センターにより実施され、主に古墳時代後期から平安時代前期までの集落跡と中世の墓域が検出されている。中世墓は土坑墓と地下式土坑であり、石塔・板碑は確認できず、台地南側斜面を削りだし整形区画を作り主要な墓はそこに作られる。調査区は路線部分の発掘のため全容は把握できないが、中世の墓域は第1～3までの整形区画とその周辺に点在する2ヶ所の土坑墓群が確認されている。

調査区の西側に位置する第1区画には、地下式土坑2基を含む土坑（墓）77基と掘立柱建物1棟が存在し、調査区外に出る南側部分を除き回廊状のテラスが周囲を巡る。遺構の配置は、北西と南西コーナーに地下式土坑を配し、整形区画内部の平坦面に土坑群と掘立柱建物が作られる。特に、回廊状遺構に沿った平坦面周縁部には、墓坑の可能性のある方形の大型土坑が多数作られる。第2区画は調査区のほぼ中央に位置し、周囲は第1区画からつながる回廊状のテラス遺構が取り囲む。中央には南北に道路状遺構が走り、これにより東西の小区画に分割されている。地下式土坑6基、土坑（墓）139基、火葬土坑1基が検出されており、特に地下式土坑は中央の道路状遺構に集中して作られる傾向が認められる。この内、401号地下式土坑、206号土坑、413号土坑からは人骨が出土し、明確に墓坑としての使用が確認できる。調査区の東端部で一部が確認できた第3区画では、周縁部にそった形で15基の土坑（墓）が検出され、70・71号土坑では人骨が出土し、土坑墓として確認できる。

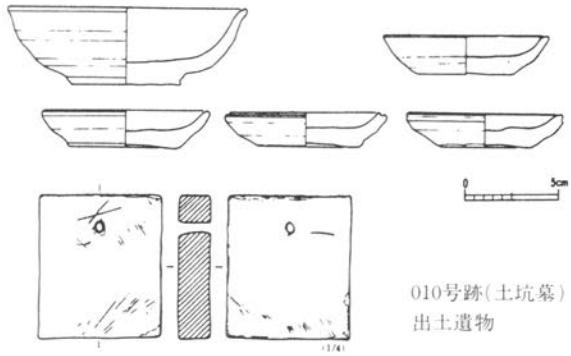
整形区画以外では、第1区画北側と、第2区画と第3区画に挟まれた平坦面に土坑（墓）の集中が認められる。第1区画北側の平坦面では、44基の土坑（墓）が検出され、土坑群の西端に位置する010号土坑では人骨とともに土師質土器の杯・小皿、石板が出土し、土坑墓として確認できる。また第2区画と第3区画に挟まれた部分では地下式土坑1基と土坑（墓）6基が存在し、土坑078・077号土坑では人骨が出土しており、これも土坑墓として確認できる。

次に、出土遺物から遺構の年代的な変遷を見てみよう。遺構の中で最も年代的に古い例としては、第1区画北側の土坑（墓）群中の010号土坑墓がある。ここから出土した土師質土器は12世紀後半代から13世紀前半代の年代が推定でき[24]、第1区画北側の土坑（墓）群は、12世紀後半代には成立し始めていたと考えられる。

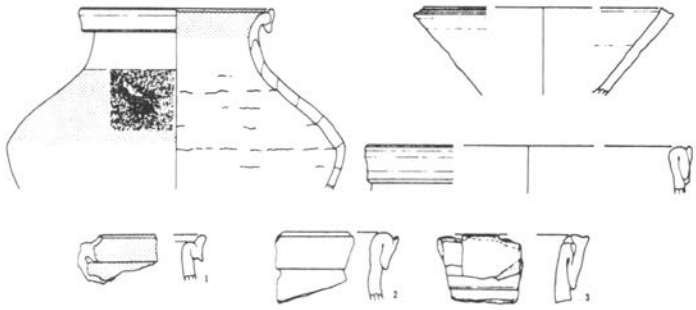
台地斜面部に作られた整形区画では第1区画北側土坑（墓）群よりは遅れる傾向が認められる。第1区画では、367号地下式土坑から古瀬戸後期様式後半に属する縁折三足盤や擂鉢が出土しており、第2区画内の土坑（墓）や地下式土坑から出土した遺物で年代の推定できるものは、古瀬戸では後期様式III～IV期に属する平碗3点、縁折三足盤3点、瓶子・擂鉢が各1点、常滑窯製品では第6型式の壷1点、第8～9型式の甕6点、同捏鉢3点があり、その他に点文亀座



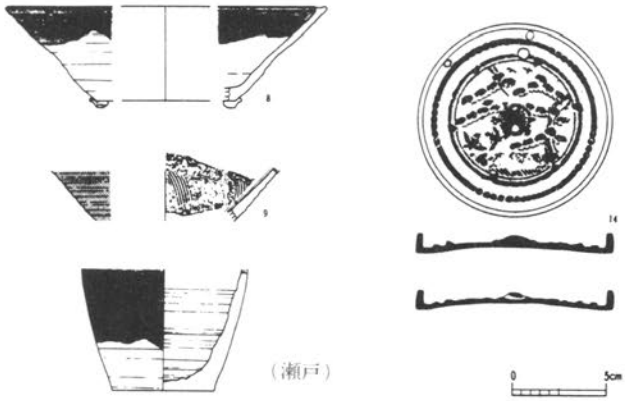
遺構全体図



010号跡(土坑墓)
出土遺物

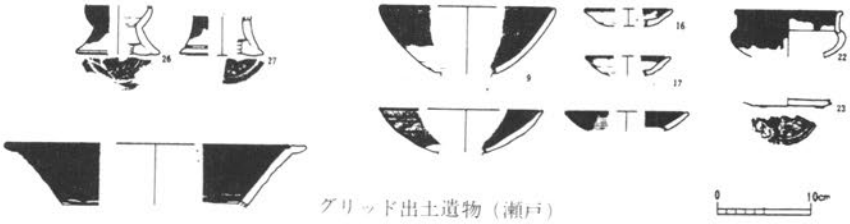


(常滑)



(瀬戸)

401・406号跡(地下式土坑)出土遺物



グリッド出土遺物(瀬戸)

第4図　西屋敷遺跡、検出遺構・出土遺物

紐の和鏡「松樹双雀鏡」も出土している。陶磁器の年代は、殆どが15世紀前半から中ごろまでの間に納まっており、この時期に頻繁に整形区画が使用されていたことを示しており、第1・2区画内の土坑（墓）・地下式土坑の出土遺物が、常滑窯第6型式（13世紀後半）の壷1点を除き、他は全てが14世紀後半以降であることから、整形区画の成立時期も14世紀後半から15世紀初頭ころまでの間に求めることが可能であろう。

一方、第3区画では、070号土坑墓から17世紀以降と思われる長石釉を施した瀬戸・美濃窯系の茶碗が人骨に伴って出土しており、南側に隣接する067号地下式土坑からは瀬戸・美濃窯大窯2期前後と思われる小皿片も出土しており、この区画周辺は16世紀～17世紀以降も墓域として機能していたと考えられる。

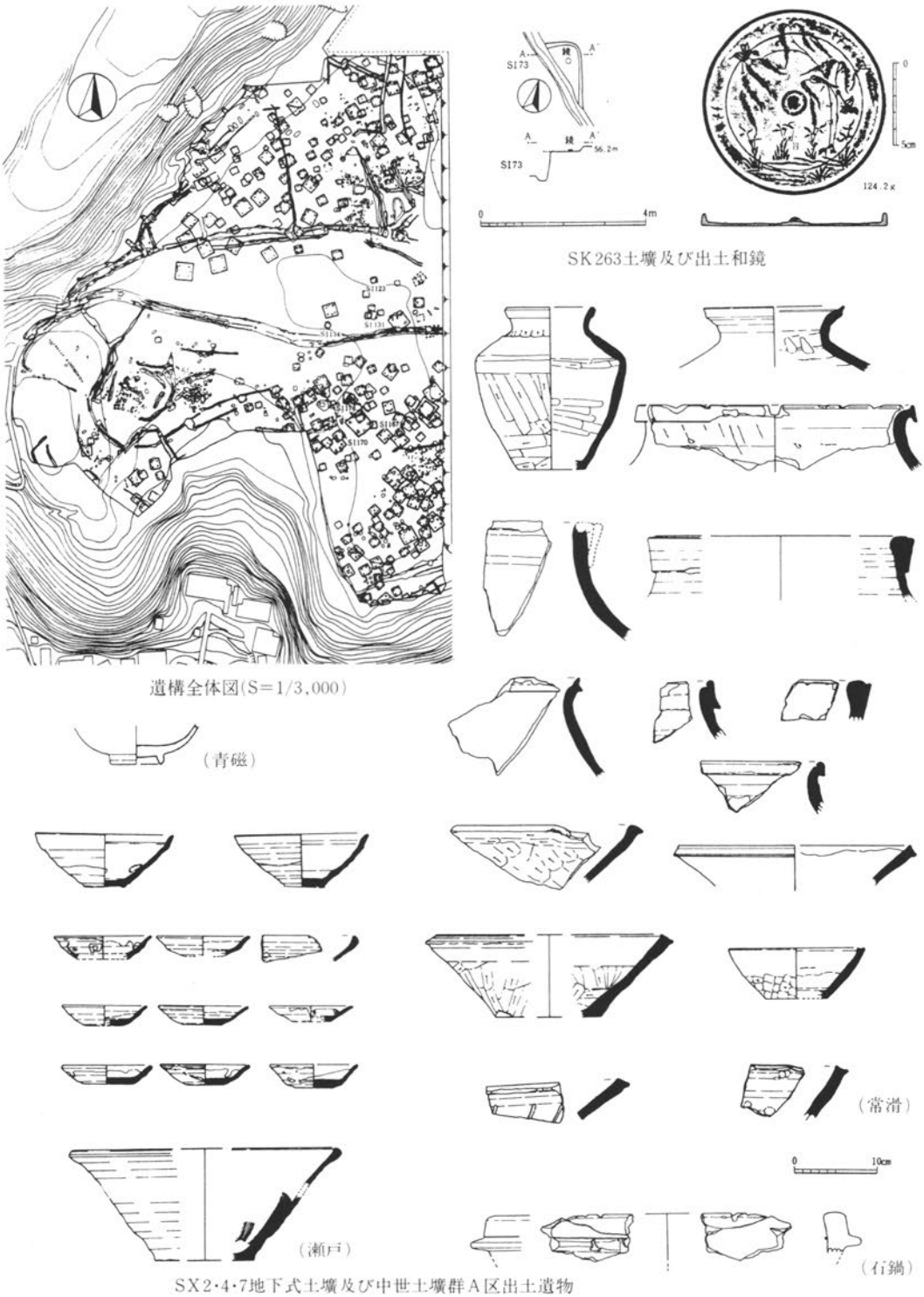
以上の状況を整理すると、まず、12世紀後半代に010号土坑墓を中心とする、第1区画北側の土坑（墓）群の形成が始まり、この墓域は調査区内からは常滑窯製品を中心に13世紀代の遺物も出土し、13世紀代も維持された可能性を考えることができる。そして、14世紀後半以降、12世紀後半から13世紀代の土坑墓を避けるように、台地斜面に土坑墓と地下式土坑を伴った整形区画が次々に作られ、15世紀前半から中ごろまでに墓域は急速に拡大したと考えられる。そして、この墓域は近世にも維持される。

＜久我台遺跡[25]＞

東金市松之郷字久我台に所在し、標高60m前後、九十九里浜に面した台地上に立地する。中世には上総国山辺北郡内に位置しており、元弘三年（1333）から享徳二年（1453）までの鎌倉・浄光明寺文書により、遺跡周辺には同寺関連の所領が点在していたことがわかる[26]。

発掘調査は、昭和57年から昭和60年にかけて（財）千葉県文化財センターが実施した。台地の東半分は既に削平されていたが、台地西側部分のほぼ全域を調査することができ、古墳時代後期から平安時代後期までの集落と地下式土坑と土坑からなる中世遺構群を検出した。特に、土坑からは人骨は出土していないが、前出の千葉市西屋敷遺跡などとの比較から土坑墓と考えられるものが多く含まれており、中世墓域として考えてよいだろう。この中世墓域と遺構群は台地縁辺部に近い部分にA～Dまでの4区画が確認されており、石塔・板碑類が殆ど出土していない点も特徴的である。

台地北側に位置するA区は、北辺と西辺を地下式土坑で囲み、その中心に多数の土坑とピットが作られるという遺構配置をとっている。主要な遺構数は、地下式土坑5基、方形竪穴状遺構1基、土坑（墓）7基前後である。出土遺物で年代の推定できる遺物を産地別にまとめると、常滑窯製品では第4型式甕・壷が各1点、第5型式壷・甕各1点、第6型式甕1点、第8型式鉢3点、第9型式甕4点・鉢11点となる。瀬戸窯製品では、古瀬戸後期様式III期～IV期の縁釉小皿7点、同平碗2点、同擂鉢3点、後期様式の瓶子1点である。青磁碗はⅠ－5b類1点とⅠ－



SK263土壙及び出土和鏡

SX2・4・7地下式土壙及び中世土壙群A区出土遺物

第5図　久我台遺跡、検出遺構・出土遺物

2類1点が確認できる。また、石鍋はB類に分類されるもので[27]、14世紀前半の年代が推定できる。これらの遺物の年代から、A区は13世紀前半には墓域として成立していた可能性が考えられ、さらに14世紀後半から15世紀代までの年代に含まれる常滑窯第8・9型式と瀬戸後期様式の製品が年代の推定できる遺物総量の82%を占めており、この段階にA区が盛んに使用されていたと考えられる。また、A区の初期の遺物である13世紀前半の常滑壷2点は、帰属する遺構は判明しないが火葬墓の骨蔵器である可能性が高く、ごく初期には火葬墓が存在した可能性を想定でき、この火葬墓を核に墓域が維持されたとも考えられよう。

台地西側に位置する墓域B区は地下式土坑2基、土坑（墓）7基前後で構成され、これらの遺構はさらに溝により二つの小区画に分けられている。年代の推定できる遺物には、常滑窯第9型式甕・鉢各1点、青磁碗E類1点[28]があり、すべて15世紀代のものである。

B区の東側に位置するC区は16基前後の土坑のみ、その南東のD区は小土坑31基で、それぞれ構成されているが、墓坑と断定できる例は無い。遺物も極めて少なく、年代の推定できる例は、C区の常滑窯第8型式の鉢1点で、ともに墓域として断定できるか疑問が残る。

一方、これらの墓域・遺構群には含まれない形で1基の土坑(墓)が確認されている。この土坑（墓）(263号土壙）はC区とD区の中間地点で確認されており、和鏡を伴っている。和鏡は菊座紐で、柳とカキツバタの文様を配したもので、12世紀後半頃の年代を推定することができ、久我台遺跡の中世墓の中でも最古の段階に位置づけることができる。

以上の状況から、久我台遺跡における中世墓地の変遷を概観すると、12世紀後半代に遺跡の中央からやや南東よりの地点に和鏡を伴った土坑（墓）が作られ、ここに久我台遺跡の中世墓地の起源を求めることができる。つづく13世紀代には北辺部のA区墓域の形成が始まり、この時点で一時的に火葬墓が導入されるようである。そして、14世紀後半から15世紀代にかけてA区では地下式土坑も作られ、地下式土坑と土坑（墓）からなる墓域が形成される。また、この段階には少なくともB区の墓域も成立したと考えられ、15世紀代に久我台遺跡の墓域は急速に拡大したと考えられる。しかし、墓域内からは16世紀代の遺物は出土しておらず、墓域としての機能は15世紀末期ころまでに終息に向ったと考えてよいであろう。

3．墓域の類型化と性格推定

前節では、県内で発掘調査された中世墓地の代表的な7例を取り上げ、墓域の変遷状況を中心に概観してみた。その結果、その墓域の構成要素にはいくつかのバラエティーを認めることができるが、大きく次の5類型に分類することが可能である。

A類型(武士層型墓域)－天神前遺跡に代表される墓域形態である。中心となる墓は、骨蔵器を

伴う火葬墓で、地上構造では方形の集石（配石）遺構と石塔類・板碑を伴う。周囲に骨蔵器を伴わない火葬墓、土葬甕棺墓、土坑墓が付随する形で営まれる。

埋葬形態は、鎌倉におけるヤグラ内に見られるような上層階級のものとも共通し比較的丁寧であり[29]、墓域も小規模なブロックで構成されることから武士層の氏族墓的な性格を想定することができる。

天神前遺跡のある梁（矢那）郷周辺については、永享年間の「二階堂盛秀書状」から、鎌倉府執事・二階堂氏との強い関連が推定でき[30]、天神前遺跡の被葬者は鎌倉との強いつながりを持った武士を想定することが可能であろう。

この類型は、典型的な例は天神前遺跡のみであるが、この他に詳細は不明であるものの、以下の２遺跡もここに含まれる可能性が考えられる。一つは白磁四耳壺や古瀬戸四耳壷の骨蔵器や多数の板碑が出土した四街道市長岡堂庭遺跡[31]、もう一つは多数の石塔や火葬墓が確認されている市原市台遺跡の北部遺構群[32]である。特に、後者は中世上総国衙推定地に近く、在庁官人層の葬送と関連する可能性があり、その正式な報告が期待される。

年代的な傾向を見ると、13世紀後半代には天神前遺跡の中核となる火葬墓は成立しており、Ａ類型墓域の基本的な構成要素はこの段階には成立していたと考えられる。また、発掘調査時点では既に墓域は破壊されていた長岡堂庭遺跡についても、骨蔵器に使用された白磁四耳壷や瀬戸四耳壷の年代から13世紀後半には墓域として成立していたと考えることができよう。

そして、天神前遺跡では15世紀代には土坑墓を中心として墓域の拡大が認められ、その後17世紀代まで墓域は機能している。

Ｂ類型（供養塔・寺院型墓域）－万福寺境内遺跡に代表される墓域形態で、１ｍを超える大型板碑などの大型供養塔の周辺や寺院境内に営まれるものであり、骨蔵器を伴う火葬墓を中心とし、骨蔵器を持たない火葬墓や土葬甕棺墓、土坑墓が付随して作られる。地上の構造物では、石塔・板碑が多く伴う。万福寺境内遺跡の場合、13世紀後半に建てられたと思われる大型板碑が核となり、その周辺に小型板碑が群集して作られていたと考えられ、東京都府中市三千人塚の状況に類似した墓地景観を想定することが可能であろう[33]。被葬者には、僧侶層やそれに帰依した武士層を想定でき、万福寺境内遺跡では中山法華経寺の宗教的な影響を考えなければならない。また、分骨の可能性のある火葬人骨の出土も、供養塔に結縁を望んだ形での埋葬を考えることができ、上記の推定を裏付けるものと思われる。

寺院境内に営まれた例では大栄町大慈恩寺境内墓地があり[34]、詳細は不明であるが、佐倉市高岡遺跡内の大福寺の遺構に伴う墓域もこの類型に含まれる可能性がある[35]。また、14・15世紀頃の石塔類が境内に見られる富津市象法寺などの寺院[36]もこの類型に含まれると考えられる。さらに、丸山町善性寺境内ヤグラなどの寺院境内のヤグラも、その埋葬形態や立地形態が共通

することから[37]、この類型に含まれると考えられよう。

年代的な傾向を見ると、万福寺境内遺跡の場合12世紀後半代には火葬墓が営まれ墓域として成立していた可能性が高いが、大型の板碑が造立されてB類型特有の墓域形態が成立する時期は13世紀後半代である。また、大慈恩寺境内墓地においては、骨蔵器は常滑窯第6型式の製品から認められ、石塔の造立も正中3年（1328）に没した真源の供養五輪塔の造立ころから開始されたようで、やはり13世紀後半から14世紀前半にかけてB類型墓域の基本的な形態が成立したと考えてよいであろう。14世紀後半から15世紀代には、万福寺境内遺跡では多数の板碑が立てられ、さらに15世紀代には根郷貝塚の部分に土坑墓群が成立し墓域の拡大が認められる。一方、大慈恩寺においても15世紀代には小型の宝篋印塔や五輪塔が多数造立され共通した傾向を認めることが可能である。そして、ともに17世紀以降も墓域として機能し続けており、中世墓が近世墓に継続する傾向も認めることができる。

C類型（土豪層主導型墓域）－神田遺跡に代表される墓域形態で、100基近い多数の土坑墓が埋葬形態の中心となり、地下式土坑がこれに付随し、数10基に登る多数の石塔・板碑が建てられるものである。多数の石塔・板碑が立てられる点ではA・B類型の墓域と共通するが、小数の火葬土坑は伴うものの、あくまで土坑墓が埋葬形態の中心となっており、その被葬者はA・B類型よりはランクが下がると思われることから、在地土豪程度の階層を想定できよう。また、神田遺跡に見られるように、墓域内に石塔・板碑を集中して使う中心ブロックとそうでない従属的なブロックが存在することから、土豪層の墓域を中核として、血縁もしくは地縁を紐帯とした集団墓へと発展する傾向を認めることができる。

この類型には、神田遺跡以外では千葉市廿五里城跡[38]、四街道市和良比遺跡[39]、市原市椎津城跡[40]、同白船城跡[41]、同村上城跡[42]、木更津市笹子城跡[43]など、多数の石塔・板碑類が出土した遺跡が含まれ、これらの遺跡の中では特に墓域が城郭により破壊されたり、城郭と併存する例が多く見られる点も特徴である。

年代的な傾向を見てみると、紀年銘の板碑では、神田遺跡の延文元年（1356）以外に、廿五里城跡の建武元年（1334）、和良比遺跡の暦応4年（1341）、康永3年（1344）の例があり、板碑の造立は14世紀前半には開始され、墓域の成立はその段階ころに求めることができる。石塔類の造立も和良比遺跡出土の永和5年（1379）と応永18年（1411）の紀年銘宝篋印塔により14世紀末期から15世紀初頭にかけて開始されていたと推定でき、出土する五輪塔の型式から15世紀代を中心に盛んに造立されたと考えられる。つまり、この類型の基本形態は、14世紀後半から15世紀初頭にかけて成立し、15世紀代には急速に発展し、墓域の拡大が行われ集団墓へと発展したと考えられる。この類型に含まれる遺跡の中で、神田遺跡以外の全ての遺跡は、16世紀代の城郭の廃棄段階までには破壊されるが、城郭における破壊を免れた、神田遺跡では17世紀

まで墓域として機能し続けている。

D類型（上層農民主導集団墓型墓域）－西屋敷遺跡・吉原三王遺跡に代表される墓域形態で、50～100基以上の多数の土坑墓を中心とし、火葬土坑、地下式土坑が付随するもので、墓域は複数の土坑墓ブロックにより構成される。地上構造では石塔・板碑は数基立てられる程度で、西屋敷遺跡のように全く立てられない場合もある。西屋敷・吉原三王遺跡以外では117基の土坑墓が確認された我孫子市鹿島前遺跡も、この類型の典型例に加えることができ[44]、報告書が未刊のため詳細は不明であるが、市原市台遺跡の中央部と南部の遺構群[45]、千葉市有吉北貝塚内の中世墓域[46]、市原市草刈遺跡内の中世墓域[47]、さらに佐倉市岩富萩山遺跡[48]などもここに含まれると思われる。

この類型では、墓が作られる場所に、大規模な台地整形区画が伴う点も特徴であり、その墓域内には、ピット群や掘立柱建物、池状の擂鉢状土坑、井戸さらに方形竪穴遺構などを伴う例が多く、単純な墓域のみでなく、生活空間、例えば僧侶が止住する程度の簡単な堂などを想定することもできよう。

C類型に比べて石塔・板碑の数が極端に少なく、土坑墓が集中し、方形竪穴遺構や地下倉としての側面も持つ地下式土坑が混在するなど、鎌倉における浜地の墓域と共通する要素が認められ[49]、この墓域の被葬者層としては、C類型の土豪層よりは下位の階層、具体的には名主のような上層農民層から一般農民層を考えることができる。また、西屋敷遺跡や鹿島前遺跡では土坑墓が100基を越え、土坑墓ブロックも5～9以上と多数に及び、これは単一の氏族の範囲の墓域では考えられない規模であり、上層農民層の墓を核とした広い範囲に対応する集団墓としての性格を推定することが可能であろう。具体的な例では、吉原三王遺跡では香取社領・吉原村の名主などの上層農民を中核とした村落墓域としての性格を推定することができる。

年代的な傾向では、西屋敷遺跡、吉原三王遺跡、有吉北貝塚、草刈遺跡においては12世紀後半には土坑墓が営まれ、墓域としては既に成立していたと推定でき、この類型における墓域自体の成立は極めて早い段階に行われていたと考えられる。中でも吉原三王遺跡に至っては墓域の成立は11世紀中ごろにまで遡及する可能性が考えられ、律令的な権威が中世まで形を変えて残存する香取社領内では古代末期以来の伝統を持つ墓域が存在していたと推定できる。このようにD類型においては早い段階で墓域としての成立が確認できるものの、この類型に特有な多数の土坑墓と地下式土坑で構成される大規模な墓域の成立は、15世紀代を待たなければならない。この15世紀代の墓域は、12世紀後半代の土坑墓を破壊せずに避けて作られる傾向が共通に認められ、15世紀の墓域は12世紀代の土坑墓を意識して形成されていると考えられる。つまり、この類型のおける墓域形成は、12世紀代に成立した土坑墓を強く意識して15世紀代に急速に行われたと考えてよいであろう。また、鹿島前遺跡では12世紀代の土坑墓は確認できないが、出

土遺物は15世紀代のものが多くを占めており、やはり15世紀を画期として急速に墓域の拡大が行われたと考えることが可能であり、15世紀代はD類型の墓域が急速に発展・拡大する共通の画期として捉えることができるようである。なお、吉原三王遺跡は16世紀代に終息に向かうが、西屋敷遺跡・鹿島前遺跡は近世墓へとその命脈を繋いでいる。そして、鹿島前遺跡や岩富萩山遺跡のように墓域内には塚が築かれ、近世においても地域の宗教的な拠点としての位置を占める例も確認できる。

E類型（農民層屋敷・垣内墓型墓域）－久我台遺跡に代表される墓域形態で、埋葬形態や墓域の構成要素にはD類型と大きな違いは見られないが、墓域を構成する土坑墓の数は少なく構成数は50基以下、20基前後のものが多いようである。石塔・板碑も殆ど使用されず、まれに1・2基が混在する程度である。久我台遺跡以外では、袖ヶ浦市文脇遺跡[50]、佐倉市駒井荒追遺跡[51]、佐原市網原屋敷遺跡[52]、佐倉市高崎新山遺跡[53]、袖ヶ浦市荒久遺跡[54]などが含まれると思われる。

墓域構成はD類と大きく異ならないので、その被葬者層についても大きな変化は無いと考えられるが、墓域ブロックは単一か2ブロック程度と小規模であり、きわめて限定された範囲に対応する墓域と考えられ、屋敷墓もしくは垣内墓としての性格を持っていると思われる。

年代的には、久我台遺跡、文脇遺跡のように12世紀後半代の土坑墓が存在するものもあるが、久我台遺跡では15世紀代に墓域の拡大が認められ、多くは15世紀代に墓域が成立する。しかし、その墓域も、久我台遺跡や高崎新山遺跡などに見られるように15世紀末期から16世紀には終息に向かっており、15世紀代に拡大した墓域の安定性は全体に低く、近世墓へ連続する例は殆ど認められない。

4．中世墓域変遷の画期と史的背景

前節では、房総における中世墓域の類型化を行うと同時にその年代的な傾向についてもまとめてみた。そこで、次に各類型とその年代的な傾向をもとに、中世墓域の変遷についてまとめることとしたい。

I期（中世墓準備期・10～11世紀）－房総においては、火葬墓を中心とする古代的な墓制が9世紀後半を境に姿を消し、10世紀代に墓制の上で大きな変化が起こったと想定できる。しかし、10世紀代の墓制を知ることのできる資料はきわめて少なく、僅かに袖ヶ浦市永吉台遺跡において三足鉄鍋を伴う10世紀後半代の土坑墓が確認できるにすぎず[55]、墓制全体の状況は不明のままである。しかし、つづく11世紀代においては市原市上総国分尼寺[56]や佐倉市高岡遺跡群において明確に土坑墓が確認でき、吉原三王遺跡では土坑墓と推定できる土坑群が検出されており、

この段階で墓制の主体は中世へと連続する土坑墓へと移行しているようである。この時期をもって中世墓の準備期として位置づけることができよう。この時期の墓域は、10世紀代まで寺院や集落の一部であった場所である。11世紀代中頃は、行政形態が後期王朝国家体制に移行する時期であり[57]、在地の支配体制や集落の立地が大きく変化したと考えられ、これに伴いそれまでの生活空間が墓域へと変貌していったと考えられよう。

II期（中世墓成立期・12世紀後半～13世紀前半）－12世紀後半から13世紀前半に至ると、土坑墓の例が明瞭に確認できるようになる。代表的な例としては先に挙げた吉原三王遺跡、久我台遺跡、文脇遺跡、有吉北貝塚、西屋敷遺跡、草刈遺跡の他に、八千代市井戸向遺跡[58]、佐原市玉造上ノ台遺跡[59]、市原市国分寺台荒久遺跡[60]など、その例は多い。この段階の土坑墓は、比較的豊富な副葬品を伴うことに特徴があり、15世紀以降の土坑墓に比べると質的に大きく異なると思われる。出土する副葬品の中心は、菊花座紐の12世紀後半頃の和鏡であり、これに短刀や土師質土器の杯・小皿が伴うものも認められる。特に、吉原三王遺跡の土坑墓では和鏡や短刀以外にハサミ、毛抜き、青白磁合子が伴い、経塚埋納品との共通点も認められ、経塚埋納儀礼とこの時期の土坑墓の埋葬儀礼に類似性も指摘することができる[61]。

また、前述したようにこの時期の土坑墓は、15世紀代に急速に発達する集団墓・D類型墓域や屋敷垣内墓・E類型墓域の中に位置する例が多く見られ、この種の土坑墓はこれらの墓域の先駆的な墓として位置づけることが可能である。つまり、12世紀後半ころに土坑墓が営まれることによって、その地は墓域としての規制をその後長く受けることになり、その地域（村落）や小集団（垣内や屋敷）内において、ある種の聖域的な性格を帯びるようになったと推定することもできる。これは、土坑墓の副葬品の内容が、太刀や甲鎧といった武具類ではなく、あくまでも和鏡や短刀といった経塚に納められた化粧道具に通ずる品物であったこととも無関係ではないだろう。

一方、この時期、9世紀末期以来中断していた火葬墓が再び確認できるようになる。代表的な例では、木更津市鳥越古墳の墳丘から出土した渥美窯の壷を骨蔵器として使用した火葬墓例があり[62]、その他に山田友治氏が資料紹介した小見川町木の内出土の常滑窯三筋壷[63]を始めとして、渥美窯の壷や常滑窯の三筋壷を骨蔵器として使用した例が幾つか確認することができる。また、B類型の万福寺境内遺跡においても骨蔵器として使用された可能性のある猿投窯の壷や常滑三筋壷が出土しており、前述の土坑墓同様、この時期の火葬墓についてもその後の墓域を規制する上で一定の機能を持っていたと推定することが可能である。

以上のように、この時期に営まれた墓は、その後の中世墓域を規制する働きを持っており、この時期は中世墓の葬制が成立すると同時に中世墓域が成立する時期としても位置づけが可能である。そして、この段階における、この種の墓制の展開の背景には、当時、全国的に盛んに

活動を展開していた勧進聖など、中央の権門寺院に関連した宗教者の関与を想定することもできよう[64]。

Ⅲ期（鎌倉型葬制の導入期・13世紀後半～14前半）－つづく、13世紀後半から14世紀前半にかけて、天神前遺跡に代表されるA類型・武士層型墓域と、万福寺境内遺跡や大慈恩寺境内墓地に代表される供養塔・寺院型墓域の基本形態が成立する。この段階に成立する、A・B類型の墓域の中心となる埋葬形態は、鎌倉における「ヤグラ」を始めとする武士・僧侶層の埋葬形態と共通するもので、葬制上の鎌倉からの強い影響を考えることが可能であり、この段階を境に在地における武士層や僧侶層を中心に鎌倉的な葬制が浸透し始めたと推定できる。

この背景には、房総における鎌倉寺院の寺領荘園の展開と、それに起因する鎌倉との宗教的なつながりを想定することも可能であろう。例えば、大慈恩寺は金沢・称名寺や鎌倉を拠点として活動した律宗僧侶との強い関連を認めることができる[65]。さらに、天神前遺跡が位置する菅生庄は、13世紀代には鎌倉・長勝寿院領として確認することができ、石製相塔と元弘2年(1332)銘の宝篋印塔が存在し、15世紀代の石塔類が多数確認できる富津市像法寺は、称名寺領の佐貫郷内に位置しており、この他にも上総地方を中心に円覚寺、称名寺、覚園寺、浄光明寺などの鎌倉寺院の寺領荘園が14世紀前半までに多数展開している[66]。この荘園内には領主寺院からの宗教的な影響を考えることができ、さらに、万福寺境内遺跡における題目板碑の出現と、千葉胤貞による八幡荘周辺の法華経寺への所領寄進の時期が一致することは、荘園領主の寺院が荘園内に果たす宗教的な影響力の強さを示していると思われる。

Ⅳ期（土豪層墓域の分立期・14世紀中ごろ～後半）－14世紀中ごろから後半にかけて、A・B類型の墓域内には板碑・石塔の本格的な造立が開始されると同時に、C類型の墓域が新たに成立してくる。C類型の墓域は、石塔・板碑を多用するというA・B類型の墓域景観と、土坑墓を中心とするD・E類型墓域の埋葬形態を結合させた形で成立しているという特徴と同時に、A・B類型の墓域からは独立した形で成立している点に大きな特徴を認めることもできる。このような特徴は、14世紀中ごろの南北朝期を境に次第に力を付け、従来の職体制に基づく支配形態から独立しつつあった土豪・国人領主層の動向と共通するものであり[67]、C類型墓域の独立性は土豪・国人領主層のこのような活動を反映するものではなかろうか。また、この後、15世紀後半にはC類型の墓域を中心に、城郭により破壊されたり、城郭と併存する例が多く見られるようになるが、これにより城郭の築造者とC類型墓域の被葬者層との間に、強い関連性を想定することも可能である。

Ⅴ期（急速な墓域の拡大期・14世紀末期～15世紀前半）－14世紀末期～15世紀前半にかけての時期は、A～C類型の各墓域で、それまでの墓域を核として土坑墓・地下式土坑で構成される新たな墓域ブロックが成立し墓域自体が拡大、集団墓的な要素を強める。それと同時にD・E類

型の墓域では土坑墓・地下式土坑で構成される墓域形態が急速に形成される。特に、D類型の墓域では台地整形区画を伴い、複数ブロックの土坑墓群が多数営まれ、集団墓としての体裁を整える。このような状況は、造墓層の急激な拡大を示しており、さらに葬制の上では火葬土坑が新たに認められるようになり、簡易な火葬もこの段階から確実に普及するようになると考えられる。

この15世紀代は、東国の板碑の上では、月待ちや庚申待ちなどの結集板碑が多数造立され、上層農民層を中心とする範囲まで、この種の信仰を紐帯とする地域の信仰集団が確認できるようになる時期である[68]。これと同時に、仏教信仰の面では教義の易行化に伴い、六字名号、題目、光明真言の浸透・普及が鎌倉時代以来進行したと考えられ[69]、さらには十仏・十三仏信仰の定着をみ[70]、近世につながる在地の仏教信仰の原形が形成される時期にも当たっている。

このような地域的な信仰集団の形成と易行化した仏教信仰の農民層への浸透・普及が相まって、急速な集団墓の発展や造墓層の拡大があったと考えることができ、火葬土坑の存在も易行化した仏教信仰の浸透を反映するとも考えられる。

これと符合するように、「𑖀𑖽（大日如来）」と無量寿経、「𑖡𑖾𑖨𑖿𑖨𑖽（不動明王）」、「薬師」などを記した15世紀前後の墨書土器が、C類型・千葉市廿五里城跡、E類型・袖ヶ浦市荒久遺跡、C類型の墓域に属する可能性のある佐原市仁井宿東遺跡[71]で出土しており、板碑以外でも、当時の墓域と浄土教信仰、真言密教信仰との関連を知ることができる。

Ⅵ期（中世墓域の終えん期・16世紀～17世紀）－16世紀代から17世紀代にかけて、それまでの中世墓域は、廃絶に向かうものと近世墓へ連続するものとへ、大きく二分されることになる。この段階で廃絶する墓域の中では、E類型に属する例が最も多く、年代的には久我台遺跡、荒久遺跡、高崎新山遺跡では15世紀末期から16世紀の早い段階で消滅に向かったと考えられ、全体的にE類型の墓域は近世墓への連続性が低い傾向が認められる。

これに対し、A～D類型に属する墓域では近世墓へ連続する例が多く見られ、この段階に廃絶する遺跡でも、D類型の吉原三王遺跡では16世紀後半まで、C類型の神田遺跡では17世紀後半まで存続し、E類型の墓域に比べ安定性は高い。つまり、E類型墓域とC・D類型墓域の一部が、A～D類型の墓域に吸収される形で近世墓は成立したと考えることが可能である。

このような、各類型における近世墓への存続性の差は、墓域の中核となる墓の被葬者層の差によるとも考えられ、言い換えればA～D類型墓域の中心となった武士・土豪層そして上層農民が強く墓域の使用に関与したかどうかが、近世墓に連続するか否かを規定していた可能性も考えることができよう。また、その一方で、地域の信仰集団の関与も少なからず影響していると思われる。例えば、D類型墓域に相当する鹿島前遺跡や岩富萩山遺跡などのように、近世段階に墓域内に、地域の信仰紐帯としての塚が築かれる例が幾つか確認でき、D類型墓域を中心

として、その安定性の背景には、近世に連続する地域的な信仰集団の存在を見ることができる。

5．まとめ

以上、房総における中世墓域について5類型に分類し、それをもとに6段階の変遷状況を考えてみた。最後に二つの問題点について触れ、まとめとしたい。

第1の問題点としては、ここで示した中世墓域の類型と変遷状況における他地域との比較である。中世墓域の変遷状況の中でも、特に明瞭な画期であるII～V期については、東国の事例では以下のような対応関係を認めることができる。

II期（12世紀後半）－中世墓域成立と経塚の関係→東京都多摩ニュータウン№513遺跡[72]

III～IV期（13世紀後半～14世紀）－A類型（武士層型）墓域、B類型（寺院・供養塔型）墓域の成立→埼玉県円照寺裏遺跡[73]、東京都府中市三千人塚

C類型（土豪層型）墓域の成立→神奈川県上の山遺跡[74]

V期（15世紀前半）－D・E類型（上層農民主導集団墓型・屋敷墓型）墓域の成立と各類型墓域の急速な拡大、火葬土坑の出現→埼玉県西通I遺跡[75]、群馬県白石大御堂遺跡[76]など

これらの事例だけで断定することは難しいかもしれないが、房総に見られた中世墓域の類型と変遷状況は、東国、特に鎌倉を中心とした関東地方には、ほぼ適応することができるようである。

一方、西国では藤沢典彦氏・吉井敏幸氏の論文に中世墓域の画期が示されている[77]。中でも12世紀末期の中世墓の成立、13世紀後半の石組墓の成立、15世紀～16世紀にかけての集団墓（惣墓）の成立という大きな画期は、まさに房総におけるII期・III期・V期の画期と一致しており、また、12世紀から13世紀代にかけて成立した武士・僧侶層の墓を核として、15・16世紀代に集団墓へと移行したという枠組みについても、A・B類型の墓域については房総においても概ね一致していると考えてよいであろう。たしかに、15世紀代における房総の墓域拡大は、西国・畿内における集団墓（惣墓）の成立との間に対応関係を認めることができる。しかし、畿内では惣墓の核は、房総のA・B類型に対応する武士・僧侶層の墓域である。これに対し、房総においては、15世紀における墓域の拡大はA～C類型でも見られるものの、上層農民層が主導したと思われるD類型墓域を中心に顕著に認められる。このことから、東国・房総では15世紀代の墓域拡大は、上層農民層を中心に進められた可能性を考えることができる。そして、畿内に見られるような数郷単位の大規模な集団墓（惣墓）へと発展せず、後述する横田郷の例のように村落単位以下の範囲に対応する集団墓にとどまる傾向の強い、房総における集団墓の限界性の原因をここに想定することも可能ではなかろうか。

第2の問題点は、白石太一郎氏が提示しているような、現在使用されている墓域と中世墓域との比較検討の問題である[78]。この点については、房総においては殆ど調査が実施されていないのが実状である。しかし、この手法によれば、村落内で墓域がどのような位置関係や景観の中で営まれているかを知ることができる。その一例として、筆者も参加した袖ヶ浦市横田地区の墓域調査を簡単に紹介しておきたい[79]。

袖ヶ浦市横田地区は、13世紀から15世紀にかけて禁裏御料所や熊野社領となった畔蒜北郡横田郷である。ここでは、A類型の武士層氏族墓に対応すると思われる葛田家墓所、B類型墓域が集団墓に発展したと思われる善福寺墓所、B類型もしくはC類型墓域が集団墓に発展した可能性が考えられる児宮墓所、さらに中世の石塔類が存在しない墓所など、多種類の墓域がさほど広くない村落内に点在しており、集団墓でも複数村落にまたがるようなものとはなっていない。今後、現在の墓域の調査を行うことにより、中世墓の近世または近・現代墓との連続性の究明、さらにその景観的な復元がさらに深まると思われる。

以上、房総における中世墓域について雑駁な考察を進めてきた。近年、急速にその数を増加させている中世墓域の資料の中でも、今回取り上げた事例は限られたものであり、今後の資料の蓄積によっては、ここで示した墓域の類型や変遷状況に変化が現れることは否定できない。今後、さらなる資料の蓄積を行うとともに、近・現代の墓地までをも視野に入れた新たな分析視点により中世墓域の研究を行っていきたい。

註・参考文献

(1) 藤沢典彦「墓地景観の変遷と背景」『日本史研究』330号　1990
白石太一郎「奈良県宇陀地方の中世墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集
吉井敏幸「中世群集墓遺跡からみた惣墓の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集
(2) 千々和到『板碑とその時代』　平凡社　1988
斉木　勝「関東型式宝篋印塔の研究」『千葉県文化財センター　研究紀要10』　財団法人千葉県文化財センター　1986
(3) 石井　進・萩原三雄編『中世社会と墳墓　帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集』名著出版　1993
(4) 『天神前遺跡』　(財) 君津郡市文化財センター　1992
(5) 伊藤喜良「上総国」『講座日本荘園史5　東北・関東・東海地方の荘園』　吉川弘文館　1990
(6) 佐藤博信「雪下殿についての覚書－上総大野家文書をめぐって－」『史観　123冊』　1990
(7) 中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」」『全国シンポジウム「中世常滑焼を追って」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所　1994
常滑窯製品の型式名と編年は、上記編年を使用した。
(8) 藤沢良祐「古瀬戸概説」
藤沢良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁8』　1982

藤沢良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅴ』　1986

藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅹ』　1991

瀬戸窯製品の型式名と編年は、上記編年を使用した。

(9)　笹生　衛「房総の中世土器様相」『史館　第23号』　1992

(10)　『万福寺板碑発掘調査報告書』　鎌ヶ谷市教育委員会　1985

(11)　『千葉県鎌ヶ谷市根郷貝塚発掘調査報告書』　鎌ヶ谷市教育委員会　1988

(12)　註10)に同じ。

(13)　調査担当者・(財) 君津郡市文化財センターの當間紀子氏からご教示を受けた。

(14)　註5)文献及び、山家浩樹「上総守護宇都宮持綱ー満済と義持ー」『日本歴史490』　1989。

(15)　池上　悟「大慈恩寺の石造物」『大慈恩寺遺跡』　大栄町教育委員会　1993

(16)　『佐原市吉原三王遺跡－東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ（佐原地区２）－』　財団法人千葉県文化財センター他　1990

(17)　木村礎・高島緑雄『耕地と集落の歴史ー香取社領村落の中世と近世ー』　文雅堂銀行研究社　1969

(18)　横田賢次郎・森田　勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』　1978

なお、貿易陶磁器の分類に当たっては、原則として上記文献を参考にした。

(19)　「高岡遺跡展」パンフレット　(財)印旛郡市文化財センター　1994

(20)　註15)に同じ。

(21)　註15)に同じ。

(22)　『千葉市西屋敷遺跡』　財団法人千葉県文化財センター他　1979

(23)　伊藤喜良「下総国」註5)に同じ。

(24)　註9)に同じ。

(25)　『東金市久我台遺跡』　財団法人千葉県文化財センター他　1988

(26)　『千葉縣史料　中世編　縣外文書』304号文書～308号文書　千葉県　1966

(27)　森田　勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『佛教藝術　148号』毎日新聞社　1983

(28)　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗分類について」『貿易陶磁研究　No.２』　1982

(29)　玉林美男「鎌倉の葬制」『佛教藝術164号』毎日新聞社　1986

田代郁男「鎌倉の「やぐら」」註3)に同じ。

(30)　註6)に同じ。

(31)　『四街道市内遺跡群発掘調査報告書』　四街道市教育委員会　1991

(32)　半田堅三「地下式壙再考－市原市台遺跡中世遺構の分析－」『市原市文化財センター　研究紀要Ⅱ』　財団法人市原市文化財センター　1993

(33)　深澤靖幸「武蔵府中三千人塚遺跡の再検討－板碑の立つ中世墓地」『府中市郷土の森紀要第七号』　1994

(34)　註15)に同じ。

(35)　註19)に同じ。

(36)　『富津市史　通史』　富津市　1982

(37)　井上哲朗「房総半島におけるやぐらの存在形態」『中世房総の社会と権力』　高科書店　1991

(38) 『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター他 1986

(39) 『和良比遺跡発掘調査報告書III』 財団法人印旛郡市文化財センター 1991

(40) 『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第10集－椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告－』 千葉県教育委員会 1990

(41) 註40)に同じ。

(42) 『村上城跡』 財団法人市原市文化財センター 1986

(43) 柴田龍司「笹子城跡の概要」『研究連絡誌 第37号 特集「小櫃川流域の中世遺跡」』 財団法人千葉県文化財センター 1993

(44) 『鹿島前遺跡 第三次発掘調査概法』 我孫子市教育委員会 1981

(45) 註32)に同じ。

(46) 笹生 衛「有吉北貝塚における中世土壙墓とその出土遺物」『研究連絡誌 第15・16号』 財団法人千葉県文化財センター 1986

(47) 註46)に同じ。

(48) 『岩富萩山遺跡発掘調査報告書』 財団法人印旛郡市文化財センター 1986

(49) 石井 進・大三輪龍彦編『よみがえる中世3 武士の都 鎌倉』 平凡社 1989

(50) 青木 豊・山本哲也「千葉県袖ヶ浦町文脇遺跡出土の和鏡について」 國學院大學考古学資料館紀要7 1991

(51) 『駒井野荒追遺跡』 財団法人印旛郡市文化財センター 1992

(52) 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI（佐原地区3）』 財団法人千葉県文化財センター他 1991

(53) 『高崎新山遺跡発掘調査報告書』 財団法人印旛郡市文化財センター 1987

(54) 加藤正信・笹生 衛「荒久遺跡の概要」註43)に同じ。

(55) 『永吉台遺跡群』 財団法人君津郡市文化財センター他 1985

(56) 註46)に同じ。

(57) 坂本賞三『日本王朝国家体制論』 東京大学出版会 1972

(58) 『井戸向遺跡』 財団法人千葉県文化財センター他 1987

(59) 註46)に同じ。

(60) 註46)に同じ。

(61) 註46)に同じ。

(62) 笹生 衛「木更津市・鳥越古墳々丘内出土の骨蔵器」『宇麻具多 4』 1991

(63) 山田友治「房総における中世のやきものについて（3）」『史館 第八号』 1977

(64) 速水 侑『日本仏教史 古代』 吉川弘文館 1986

(65) 黒沢哲朗「大慈恩寺遺跡の現況と沿革」註15)に同じ。

(66) 註5)に同じ。

(67) この点に関連して、房総における仏教信仰と土豪・国人領主層との関係について考察した例に、吉田辰郎「十四世紀の造仏活動の積層について－上総地域の禅宗寺院の例を中心として－」『千葉史学 第24号』 1994がある。

(68) 註2)千々和著書

(69) 佐藤弘夫『日本中世の国家と仏教』 吉川弘文館 1987

(70) 川戸　彰「千葉県の十三仏板碑」『野中　徹先生還暦記念論集』　1993

(71) 『佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中遺跡』　財団法人千葉県文化財センター　1990

(72) 『多摩ニュータウン遺跡　昭和60年度（第4分冊）』　財団法人東京都埋蔵文化財センター　1986

(73) 『円照寺裏中世墓址』　入間市教育委員会　1982

(74) 『上の山遺跡』　横浜市埋蔵文化財センター　1992

(75) 『西通Ⅰ遺跡』　上尾市教育委員会　1985

(76) 『白石大御堂遺跡　園地を伴う中世寺院址の調査』　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団他　1991

(77) 註1)藤沢・吉井論文

(78) 註1)白石論文

(79) 鈴木哲雄「上総国畔蒜荘横田郷の「荘園調査」について」『歩く中世　№3』「あるく中世」の会　1992

（財団法人君津郡市文化財センター）